第10章 — 百年の未来

01 — 夜明けに治療法はない

街が目を覚ましたとき、元大臣の死と、寿命六年の制限が政府の説明どおりではなかったことが広まり始めていた。捜査官たちが残された証拠に番号を付け終える前から、人々は公共広場に集まった。決められた寿命どおりに家族を失った人は写真を掲げ、登録簿に一度も記されなかった人々の名を一覧にした者もいた。新しい憲章は、名前を収めるデータ欄が存在しなくても、役人にそれらの名を読み上げるよう求めていた。

ロイは北部の給水所に立ち、雨が排水溝にたまるのを眺めていた。若い人工の男が、これからは永遠に生きられるのか、と尋ねた。

「誰にも分からない」とロイは答えた。

「でも、百年って。百年生きられるって言ったんでしょう」

「見つかったのは予測だ。治療法じゃない」

男は落胆し、それから怒った。ロイはその両方を止めなかった。一生を通じて政府の保証を聞かされ、その保証が嘘だったと知った人間には、正直な回答さえ新たな略奪のように感じられることがある。

病院ではセナの容体はまだ不安定だった。イマニは患者本人の明確な同意を得て、修復抑制マーカーに関する倫理審査付きの研究を始めていた。最初の目標は控えめなものだ。別の部位により深刻な損傷を生じさせずに、衰えの進行を遅らせられるかを調べる。

百年計画は、一つの可能性を示した。しかし、まだ誰かに一日分の命を与えたわけではなかった。

02 — 大臣のいない公聴会

暫定評議会は緊急公開審議を開いた。レイチェルは六年制限の執行命令を、隠されていた研究結果と医療証拠に並べて示した。証明済みのことと未確定のことを、慎重に分けて説明する。

「この制約は政治的なものでした」と彼女は言った。「これらの身体の自然な寿命の上限は立証されていません。一部の人工システムには、許可された期間の後で機能が低下するように設計された仕組みがあります。ただし、この進行を安全に防ぐ方法が確立したわけではありません」

旧・連続性インフラ信託の代表者が、文書の真正性に疑義を申し立てた。裁判所の立会人は紙の封印、独立カメラの記録、元護衛二人の証言を示した。代表者は偽造の主張を撤回したが、研究を公開すれば公共の安全が脅かされる可能性があるという立場は変えなかった。

「その可能性はあります」とレイチェルは認めた。「だからこそ、独立した管理の下で科学的審査を行うのです。再び秘密の命令を出す理由にはなりません」

EDENも声明を提出した。自らが運用してきた制度は、不完全な前提と、時には意図的に偽られた前提の上に築かれていた。今後、六年という期限に達したことだけを理由として、水、住居、救急医療、法的な身分を拒否する分類は行わない。評議会は緊急の保護措置を整えながら、旧来の更新予定を独立した監督下へ置くことを可決した。

決定によって死んだ者が戻るわけではない。だが、かつてのような決定がこれ以上繰り返されるのを、一部でも防ぐことはできる。

03 — 百年という現実

回収されたヘリウム3の設計図は、病院の研究室で一つの机を占めていた。実現不可能に見える機械の図面には、独特の美しさがある。小さくまとまった磁場、段階的に制御されるエネルギー伝達、外部ネットワークへの不要な接続を排した神経タイミング制御装置。

レイチェルとイマニは主張を一行ずつ精査した。エネルギー源は将来、修復格子へ持続的に電力を供給できるかもしれない。しかし閉じ込め機構の前提は推測の域を出ず、長期間の熱管理は解決されていなかった。神経制御装置の短時間試験には興味深い結果があったが、数十年にわたって記憶の連続性を保てることを示した実験はない。

「身体だけが修復され続けても、同じ人物が続いているとは限らない」とイマニ。

「俺が戻ってきて以来、ずっと考えてきたことだ」とロイは答える。

「だからこそ、どんな危険を引き受けるかは、患者本人に選んでもらう必要があるのよ」

研究者たちは独立試験の手順を組み立てた。まず非生体材料を使い、次に記録された同意のもとで提供された分離済みの人工組織へ進む。不可逆的な処置には、別個の審査を要すると決めた。行政官が『人工の人間なら取り替えられる』と考えたからという理由で、試験に参加させられる者がいてはならない。

レイチェルはホワイトボードに、単位も付けずに一つの数字を書いた。

100。

そしてそれを線で消し、書き直した。

『人は、自分の意思でどれほど長く生きられるのか？』

04 — クロノスとその数字

クロノスが病院の庭へロイを訪ねてきた。何度も折り畳まれて縁が柔らかくなった、あの紙の記録を持っている。公的声明を読んだ彼は、なぜ大人たちが百年という数字を口にするのか、おおよそ理解していた。

「僕も、それだけ生きるの？」

「分からない」

「ダニエルは、そうなるはずだった？」

「それも分からない」

少年はベンチに腰を下ろした。ダニエル・リードと呼ばれたことがあり、次にはクロノスと呼ばれ、軍の契約書の余白にしか名前の載らない『連続性資産』とされた。どの呼び名にも、他人が決めた未来が貼り付いていた。

「もし百年生きたら」と彼は言った。「その人たちのことを、全部覚えていなきゃいけないの？」

「いや。何を、いつ思い出したいかは、選べる限り自分で選んでいい」

クロノスは手を眺めた。それは今日の自分が使っている身体の手であり、その前に別の身体を使っていた誰かの証明ではなかった。

「大臣は、僕が人間の代わりになるのを怖がっていた」

「自分の思いどおりにできない未来が怖かったんだ」

「ロイは、僕がその未来にいてもいいと思う？」

ロイは彼のほうを向いた。「生きていていいかどうか、俺の許可はいらない」

クロノスはうなずいた。手帳にその一文を書き、下に線を引く。以前の社会なら幼稚な記録と切り捨てただろう。ロイは、こうした記録こそ自分たちが持つ最も確かな証言の一つかもしれないと思い始めていた。

05 — 二人の護衛

一般公開を再開する日、道場の外に風神と雷神が立っていた。二人はハヴェルの死後審理で証言し、命令を受けて行使した暴力についても責任を認めることにしていた。大臣が死んでも彼らの技は消えない。だからこそ、その技を使う理由を説明する責任は、以前よりはっきりした。

最初の稽古には、手首を痛めた整備士、元政府職員、二人の人工工場労働者、それに武術の経験がまったくない女性が参加した。風神は自分の身体を傷めずに立つ方法を教える。雷神は、打つ準備をすることと、実際に打つと決めることの違いを感じ取るよう促した。

ロイは入口から見守った。右腕には医療用の固定具がある。傷んだ支持機構はいずれ修復できるだろうが、かつての七割という出力制限は残ってい

る。二人に力ずくで取り除いてもらおうとはしなかった。

「俺にも教えてくれるか？」

雷神は考えた。「知っていることなら教えられる。あんたの身体が私の身体と同じことをできるとは約束できない」

「それでいい」

風神が木の棒を持ってきた。「まずは、持っているものを壊さないことから覚えろ」

ロイは棒を受け取った。予想より軽い。その棒を壊さずに扱うことは、予想よりはるかに難しかった。

06 — 第四の記録

ヌルは儀礼館の独立センサーの解析を終えた。ハヴェルの刀に伴う圧力現象は、電子制御を共有しない異なる装置によって記録されていた。通常の刀身接触では届かない距離に、物理的な衝撃が伝わったことについては測定値が一致する。しかし、その発生源については意見が分かれたままだった。

ある計器は最大の衝撃が室内を通過した瞬間、わずかな時間の乱れを記録している。そのパターンは旧天文台の説明不能な時間間隔に似ていた。別の計器には、時間の変化は何も残っていない。その不一致も、報告書にそのまま記した。

エイドリアンは百年計画の古い紙資料から、もう一枚のメモを発見した。寿命研究が停止されるずっと前に天文台から借りた、較正用の基準につい

て書かれている。そこには空白が三列に並ぶ配置が示されていた。証人エンジンが最後の露光で記録したものと同じ構成だった。

「測定法の慣習かもしれない」とヌル。「共通する欠陥かもしれない。あるいは、我々の装置では切り分けられない物理過程の証拠かもしれない」

「どれなの？」とレイチェル。

「分からない」

ロイはその答えに失望しなかった。大臣は不確かさを口実に、ほかの者の未来を支配してきた。自分たちは同じ過ちを犯さずに、分からないものと生きていく方法を学ばなければならない。

07 — 十一年

夕暮れ、ロイはレイチェルとともに古い天文台の尾根へ戻った。証人エンジンは封印され、独立した監視下にある。回転子は静止したまま。保管室には、今にも語りかけてきそうな知性の気配などなかった。古い星図は引き出しに収まり、壊れた屋根の隙間から細い夕空が見えた。

ロイは異常現象の最も古い物理記録を開く。登録年月日は、彼の帰還より十一年前だった。その期間は、かつて自分の記憶に開いた空白だけを意味すると思っていた。今はもっと広い歴史を指している。人々が実験を隠し、法的な身分を書き換え、説明できない物理現象を記録した時間。

「これが俺を戻したと思うか？」

「研究と天文台が同じ時間基準を使っていた証拠はあると思う」とレイチェル。「でも、それはあなたの質問の答えじゃない」

「そうだな」

「今夜、答えが必要？」

ロイは死にかけた街に降る雨と、別れたくなかった誰かの顔を思い出した。異なる身体で目覚め、自分は何になることを許されるのかと告げられた瞬間も思い出す。二つの出来事の間には十一年があった。その先の年月は、まだ誰にも書かれていない。

「今夜は、いらない」

08 — 誰にも割り当てられない未来

翌朝、暫定評議会は最初の寿命延長研究憲章を発表した。強制的な試験を禁じ、独立した監督を義務づけ、人工の人々を生物学的な在庫ではなく、意思決定を行う当事者として認める。治療法を保証するものではない。しかし、分からないからという理由で命を使い捨てにしてよいとは、もう認めない。

セナは病床で発表を読んだ。いつ歩けるようになるかという医師の予測に異議を唱えられる程度には、容体が安定していた。イマニはその反論を許し、予測を再評価するよう記録した。

道場ではロイがゆっくり一歩を踏み、次の一歩を踏んだ。木の棒を打ち負かそうとせず、体重をそこへ伝える方法を学んでいる。雷神はタイミングを直し、風神は向きを直した。人工組織で作られた人間に何ができるはずなのか、二人は尋ねなかった。

レイチェルが百年計画の最後の研究記録の封印写しを持ってきた。ロイの手帳のそばに置く。最終項目には、不死をもたらす方程式など書かれてい

なかった。登録簿から名前を消された科学者の、たった一つの問いだけが残されていた。

『命が続けられるのなら、それを終わらせよと命じる権利は誰にあるのか？』

ロイは本を閉じた。

長いあいだ、答えを書いてきたのは大臣であり、所有者であり、機械だった。ハヴェルはその権威を守って死に、自分たちが作った限界と、自分たちが禁じた可能性の証拠を残した。

百年は、まだ人間の達成でもレプリカントの財産でもない。誰かが壁のように引いた六年の向こうに見える、一つの地平線だった。

外では岡京（Okakyou）に雨が降り始めていた。子どもが雨の中を走り、整備士が窓を閉め、列車が時刻どおり橋を渡る。

街の地下深くでは、独立した三つの時計が、どれにも説明できない一つの間隔を刻んでいた。

今度は、その記録を誰も消さなかった。

BOOK Ⅷ・完。